

日韓共催

伝統音楽と新作能舞

「望玉恨歌」

ぼうこんか（マンハンガ）

愛—別離と再会の物語

ああ やつとお会いしましたね
아아 이제야 만났네
アア イゼヤ マンナネ



【韓国公演】2024年12月5日(木) 韓国国立国楽院ウミョン堂
【日本公演】2024年12月11日(水)・12日(木) 鏡仙会能楽研究所

アア イジェヤ マンナンネ
ああ やつとお会いしましたね

これは、新作能「望恨歌」の節です。この韓国語で語られる言葉は、歴史的意味合いを帯び、日韓の友好なくしては存在しない『望恨歌』を象徴するキーワードです。この新作能「望恨歌」は、多田富雄先生が日韓の歴史を真つ向から捉え、戦争の時代に別離を余儀なくされた人間の魂の再会を描いた作品で、未来のあるべき私たちの姿を想像させてくれます。かつての戦争の時代、夫を徴用工にとられ、二度と会うことはできず、ひたすら悲しみの中で待ち続ける女性。老婆となり、人知れず暮らす時、日本から僧侶が亡き夫の手紙を届けてくれる。

「ああ やつとお会いしましたね」

私達はもう一度出会い直さなければなりません。対立をあまり相互に非難し合うことではなく、静かに顧みて、不幸を胸に刻み、悲劇を繰り返さないために何が出来るかを考えさせる力が能にはあります。

5年前、多田富雄追悼公演として国立能楽堂で『望恨歌』を上演した折に、この作品の大事なモチーフ「百済歌謡―井邑詞」をミン・ヨンチさんと国立国楽院の方たちと復曲をしました。それをさらに深め、日韓でこの『望恨歌』を一つの作品として創り上げます

今回の望恨歌は、観世流シテ方 鶴澤久師ほかの能楽師と人間国宝の小鼓方大倉源次郎師、また韓国国立国楽院の楽師や舞踊手も招聘し、12月5日に韓国ソウルにて公演、12月11日・12日は東京にて公演を致します。

日韓の演者がともに一つの作品を創り上げ、お互いの理解を深め、新しい表現を、さらに新しい時代をとものに切り開いていきたいと願っています。

解説「新しい時代を切り開く共同創作を」

笠井 賢一

即興曲『神娥慰』

シナウイ

演奏 韓国国立国楽院

ミン・ヨンチ

神娥慰(シナウイ)とは、漢江以南と太白山脈西部地方の巫俗音楽に由来する民俗器楽合奏曲で、南道民謡の旋律を基本に様々な楽器による即興演奏。今回は韓国国立国楽院の歌舞楽と、ミン・ヨンチのチャングで神娥慰を奏でます。

休憩

日韓共同創作 伝統音楽と新作能舞

ほうこんか(マンハンガ)

『望恨歌』

愛―別離と再会の物語

シテ 李東人の寡婦 鶴澤久
ワキ 日本の僧侶 御厨 誠吾

歌 ビリ パク・チワン

テグム キム・テヒョン

アシエン チェ・ヘリム

打楽 キム・テジョン

正歌 ジョ・イルハ

パンソリ ジョ・ジョンヒ

舞踊 イ・ハギヨン

チャング ミン・ヨンチ

能本 多田 富雄
構成・演出 笠井 賢一

舞囃子『石橋』

しやつきょう

柴田 稔

松田 弘之

大倉源次郎

大倉慶乃助

小寺真佐人

鶴澤 光

小早川泰輝

アジアに広くある獅子舞。韓国にもあり、「石橋」はその獅子舞の音楽的にも舞においても一つの到達点。

鶴澤久 観世流シテ方能楽師。重要無形文化財総合指定能楽保持者。「乱」「石橋」「道成寺」「卒都婆小町」「鶴鶴小町」「檀垣」「娘捨」などを被曲。海外公演、現代演劇など新しい試みにも出演。観世流故郷澤雅、故郷世寿夫、故郷世鎮の版に師事。安宅賞受賞。川崎市文化賞、川崎市文化大使。観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。

大倉源次郎 重要無形文化財各個指定(人間国宝)、能楽小鼓方宗家。能楽協会理事。流派を超えて21世紀の能を考える「能楽座」座員。新作能、復曲作にも数多く参加。海外公演は延べ30を超える。奈良県桜井市多武峰談山神社にて奉納「翁」を制作。著作淡交社「源次郎能楽談義」。

ミン・ヨンチ チャングとテグムの奏者作曲家。ソウル大学音楽学部国楽科卒。サムルソリ競演大会個人部最優秀賞、韓国文化芸術委員会主催ARKOにて作曲賞を受賞。韓国伝統音楽の大衆化において先駆者の一人。「新韓楽」では、日韓で公演、日本全国で3万人を動員。アルパム、HANA。国楽管弦楽団との競演、梨花女子大学、秋藝芸術大学講師。

イハギヨン 舞踊家。世宗大学舞踊科学士、韓国芸術総合学校舞踊院実技科専門士、尚明大学公演芸術経営学博士卒業。国家無形遺産処公務全修者。国家無形遺産産物州剣武履修者。国家無形遺産ソドリ伝授者。韓国国立国楽院「朝鮮の伝統音楽である「国楽」の継承・発展のために1950年開院。公演場と楽器や資料を展示する博物館のほか、正楽団、雅楽、民俗楽団、舞踊団、創作楽団の四つの専属芸術団がある。現代の国民に密着した国楽、世界で活動する国楽を目指し、海外公演も多数。国楽研究、テレビラジオやネット番組配信、全国国楽コンテストの事業など。

笠井賢一 鏡仙会(能観世流)プロデューサーを経て、アトリエ花習主宰。演出家・劇作家として古典と現代を繋ぐ演劇活動を行っている。石牟礼道子作新作能「不知火」、多田富雄作新作能「石仙人」、「花供養」、ヤドウシガロドワイッチ作「調律師・シヨンの能」、「鎮魂」アウシュウィツクシマの能」等多数演出。著書「芸能の力―言葉の芸能史」(藤原書店)ほか。

多田富雄 1934年-2010年。東京大学名誉教授。世界的な免疫疫学者として抑制T細胞を発見。野口英世賞、朝日賞など多数受賞。文化功労者。能に造詣が深く、自ら小鼓を打ち、心臓移植を主題とする「無名の井」をはじめ「望恨歌」「石仙人」など現代の課題をテーマとする新作能を手がけた。2001年脳梗塞に倒れて後、詩人・能作者として再生、「原爆忌」「長崎の聖母」「沖繩残月記」「花供養」など新作能を書いた。

【日本公演】2024年
12月11日水・12日木
19時開演(開場18時30分)
会場：鏡仙会能楽研修所
〒107-0062 東京都港区南青山
4-21-29 Tel.03-34401228 5
(表参道駅A4出口より徒歩5分)
入場料：自由席7000円(税込)
お申込・お問い合わせは
こちらのフォームへ↓
一般社団法人アトリエ花習
Tel.070-6475-2525
共催：韓国国立国楽院・アトリエ花習
後援：駐日韓国大使館 韓国文化院

(株) Hansot

